

過疎山村の伝統工芸指導について

— 福岡県八女郡矢部村 —

福岡県筑後農林事務所 元村 桂助

1. はじめに

近年、都市と農山村との文化の相互交流が重視され各種の事業計画や事業実施が為されている。

福岡県矢部村でも、過疎及び高齢化(表-1)、嫁不足¹⁾等、多くの問題を抱えながら、リフレッシュふるさと推進モデル事業計画(国土庁)・林業後継者活性化対策事業計画(林野庁)・ふるさとの森交流活動事業(福岡県)・ふるさとの香り事業(村)・矢部村祭事業(村)に取組み、村の活性化を図ろうとしている。

その一環として、キハダ・アカネの栽培試験等を実施し、これを利用した染色技術の研究も婦人林業教室(福岡県)等で取組まれ、地域の歴史や風土に根ざした地域文化を再認識する気運が高まりつつある。

そこで、これらの事業に対応し、今後の普及指導に役立てる為、地域文化の一面である伝統工芸について調査し考察した。

2. 調査内容

(1) 伝統工芸に対する調査

この調査では、①ゲート・ボールをやっていた高齢者、男19人・女14人(65才から85才)へのアンケート。②二人の高齢者Tさん(女85才)・Mさん(女100才)及び内職で久留米がすりを織るKさん(女48才)に対する個別聞き取り調査を行った。

その結果は、表-2のとおりである。

明治31年に編集された「矢部村誌」には、茶・こうその栽培とともに蚕業を勧めているが、繭の状態での出荷がほとんどで、明治中期以降において絹糸での織物を体験した事例を聞いたことが無かった。しかし、アンケートの結果から一人の女性が昭和初期まで、絹布を繭から糸にして織っていることがわかった。

また、アンケートの中で、「自分の身に付けている工芸技術を生かした手仕事の機会があれば、ゲート・ボールの時間を裂いてやれるか?」との問いに対して「技術的なアドバイスだけならよいが、実際の籠や織

物となると、目が悪かったり、手先がきかなかつたりで、自信がない。」と答えた人が多かった。

Tさん・Mさんへの個別聞き取りでは、男が茶摘み籠・箕・ふるい等の農具をツツラフジで作っていたことや明治40年頃から昭和12・13年頃にかけて、山着や家族の正月の晴着を木綿糸で織るために、黒木町の堀迫にあった染め屋に糸を持って行き、1かせ(768m)を1銭染め(並染め)から3銭染め(上物染め)までであるランクの中から用途によって染め分け、山着用綿布は、1銭染めで縞に織り、晴着用には、2銭から3銭染めで鳥や花、かすり模様の生地を織ったこと等の話が聞かれた。

昭和50年から内職で久留米がすりを織っているKさんは、それまで全くの素人であったが、1週間ぐらいの技術特訓で織りを覚えた。

そして現在、筑後市の織り子として、一反(10.91m)を10時間で織り上げ、4,000円を受け取っている。

しかし、この仕事には、生地幅38cmを織るのに縦糸600本を織機にセットする作業があり、根気と手先の器用さが要求される。

(2) 矢部村高齢者生産センター調査

同センターは、昭和52・53年度に国土庁のモデル事業として発足し、高齢者の就労の機会と場所の確保が目的であった。そして、当初70才から80才までの男5人が、8時から17時まで2,500円/日で花台の製作を行っていた。

ところが、昭和56年頃からゲート・ボールが盛んになり、ここでの収入を小遣い程度にしか考えていなかった5人は、徐々にやめている。

これには、健康管理上の問題と、「高齢者は、わがままで言うことを聞いてくれない。」と言う様な使用者側からの声も聞かれた。

現在は、55才前後より若い労務で平均価格3,100円/個の花台を中心に作っている。同所の昭和60年度の決算は、1,427,000円の欠損となっておりケヤキ原木代300万円の計上額に比べ製品価格の安いものを作っている結果になっている。

今後の改善の方向としては、性能のよい機械等を購入して生産効率を高めることや、品質・デザインのすぐれた付加価値の高い商品生産へ転換すること等が考えられる。しかし、反面、このような方向付けは、益々高齢者の雇用を難しくすると思われる。

この様な状況下で、最近、同センターの職員Yさん(男49才)がツツラフジヤクズなどのつるを材料として作った簡単な花籠4〜5個が、3000円/個で売れており、高齢者の伝統工芸技術を生かす方法を示唆するものとして注目される。

(3) 婦人林業研究グループは、昭和60年度の婦人林業教室から草、木などの天然材料を使い染色技術を研究するグループとして、発足したもので、現在会員17名(平均年齢46才)で、活動を行っている。

この特徴としては、異業種の福岡県福岡工業試験場の鳥丸研究員、福岡県林業試験場の猪上研究員、福岡県筑後農林事務所元村らが、それぞれの立場で一体となって当たっていること、使用している材料が、ケヤキののこくず・サクラの枝葉・キハダ・ススキ・クズカズラ・オニグルミ・アカメガシワ・クリのイガ等で、会員の身の回りの山林で調達できるものを使用し家族の生活用品(Tシャツ・ハンカチ・毛糸・木綿糸等)を染めていることである。

このため、草・木の染物を中心として、家族の地域の伝統工芸への感心も深まっており、材料集め等には夫も協力したりしている。

村としては、この様な動きをはじめに述べたリフレッシュ事業や林業後継者活性対策事業等での都市との交流メニューに結び付けていく計画を立てており、同グループの今後の取組みに期待している。

3. むすび

これまで述べてきた様に、過疎と高齢化が進む山村にあって伝統工芸品の振興を図るには、色々な問題点がある。しかし、その意義は、豊富な原材料と生産体験豊かな高齢者の能力を都市との交流事業の中に生かせることと、都市との交流の過程で、望まれる伝統工芸品の在り方を探ることにより、流通を切開き経済面で魅力ある村作りができることにあると考える。

引用文献

- (1) 瓜生恵美子、八尋宣子：日林九支研論 38, 11~14 1985
- (2) 矢部村教育委員会：郷土教育資料、6~8, 1966

表-1 近年における福岡県矢部村の人口の推移

区分	M22	19	S15	S25	S30	S35	S40	S45	S50	S55	S60
世帯	618	-	-	1074	1063	978	898	788	728	708	693
総数	3489	4462	6062	6251	6035	3513	4274	3445	3053	2696	2484
65才以上	-	-	-	-	-	-	423	444	438	455	542
					*		(10)	(13)	(14)	(17)	(22)
農業人口	-	-	-	-	-	-	-	2715	2197	2009	1824
					*			(79)	(72)	(75)	(73)
歴史的背景	村合併(M22) 日向神ダム完成(S36) 鯛生金山(M31-S45) 電柱材活発出荷(S35-S45) 太平洋戦争(S18-S20) オリンピック(S39)										

注) *印の段の()書きは、総数に対する比率。

表-2 主な伝統工芸品及び原材料生産の状況

原材料名	製品名	明治	大正	昭和						流通	伝承状況	経験者数
				10	20	30	40	50	60			
綿	木綿糸								○	自家用・久留米がすり	+	○
ヘラノキ	綱・簀								△	自家用	-	△
カラムシ	服の生地糸								○	素材の葉を落し広川町へ出荷	-	-
麻	ロープ								○	自家用	-	△
キハダ	染料								△	〃	-	-
クスギ	〃								△	〃	-	△
ツツラフジ	お茶籠等								△	〃	+	△
竹	〃								△	村内で売買	+	△
稲ワラ	わらじ								△	自家用	+	○
コウゾ	和紙								○	冬皮を剝、黒木の仲買人に販売	-	○
羊毛	毛糸								○	刈った毛を黒木へ、製品と交換	-	-
養蚕繭	絹糸								○	繭を農協集荷、カネボウへ出荷	-	○

注) ○—○栽培し原料の形で出荷した・△—△原料を利用して製品化及び商品化した、
+教えた事がある・-教えた事がない、○経験者が多い・△普通・○少ない